子どもを真ん中に保育を考えるⅡ

―遊び心を手がかりに―

企画・司会　佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）　指定討論者　村石理恵子（東京女子体育短期大学）
企画・話題提供者 佐々木麻美（お茶の水女子大学附属幼稚園）　話題提供者 伊藤綾子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

１．企画趣旨

保育の日常は、心躍る楽しいことも沢山あるが、子どもとの関係が行き詰まったり、遊びが広がらずに悩んだりなど、同じくらい難しさを感じることも多い。本シンポジウムでは、子どもの生きる世界を感じながら、保育者がどのような心もちで子どもと関わればよいのか、日々、子どもと過ごす保育者の語りを通して考えていく。手がかりとして、「遊び心」に着目してみることとする。「遊び」とは、例えば車のハンドルのように、ゆとりがあること、と捉えると、「遊び心」とは「ゆとりのある心」ということになるのだろうか。ゆとりがあることが子どもとの関わりにどのような影響をもたらすのか、はたまた、ゆとりとはどのような状態を意味するのだろうか。子どもを真ん中に保育を探究していくこととする。（佐々木麻美・佐藤寛子）

２．話題提供１　「アリさんになってみる　３歳児」

12月初旬、音楽をかけて、身体を動かして遊ぶことが好きな３歳児は、クリスマスが近づき、クリスマスの曲に合わせて、踊ったり、鈴を鳴らしたりして楽しんでいた。その様子を見て、ふと、動物が好きで、なりきる遊びをしたいというA児の思いに応えられずにいたことを思い出し、３歳児でも楽しめる曲を探した。「おつかいありさん」のカセットを見つけたので、保育室へ持っていった。

数日後、クラスの子どもたちがクリスマスの曲をかけ、鈴を鳴らして遊んでいる中、じっと音楽を聴いているA児の姿があった。しばらくして、「違うの（曲）にして」とA児が私に言ってきたので、「これはどう？」と「おつかいありさん」のカセットを見せると、「うん」とうなずいた。曲に合わせて、私がアリになって動いてみると、A児も触角のように頭に指をあててアリになり、ゆっくり動き始めた。私がA児の方を向き、こっつんこする仕草をしようとすると、A児は私にぐっと近づいてきて、「こっつんこ」と、おでことおでこをくっつけた。２回ほどリピートして遊んだが、他の子どもたちに呼ばれ、園庭へ行かなければならなくなった。A児は「もっとやりたい」と言う。保育室にいた数人の子どもたちに向かって、私が「だれかやってくれませんか～？」と何度か誘って、誰かやってくれるといいなと思いながら、そのまま園庭へ出た。その後、A児は「だれか一緒にやってくれませんか～？」と大きな声でいうと、そばにいたB児が応えたようだ。そして、B児がリードしながら、A児はB児の方を見て、少し恥ずかしそうにゆっくり動き、２人で「こっつんこ」と、とても楽しそうだったと、後からフリーの保育者に教えてもらった。私がA児の思いに応えられず、気になっていたのだが、A児の思いが友達に受けとめてもらえたとわかり、ほっとした。

後日、クラスの子どもたちが縄跳びをして遊んでいたので、私も一緒に跳んでいると、その中のC児が足をひっかけて転び、大きな声で泣き始めてしまった。この頃弟が生まれたばかりで不安定だったC児は、一度泣き始めるとなかなか泣き止まない状況であった。ちょうどその時、保育室近くのコート室で、A児が「おつかいありさん」の曲をかけて、踊ろうとしていることがわかった。C児の気持ちはまだ沈んでいたが、手を引いたままコート室へ向かった。

コート室では、「おつかいありさん」の曲が流れ、女児たちが鈴を鳴らしていた。A児も鈴を持っていたが、私たちの姿を見つけると、急に鈴を置いた。アリになって踊りたいのだと思った。私は今日も一緒にやろうと思い、C児と手をつないだまま片手で頭に触角を作り、しゃがんでA児の方を向いた。ところが、A児は私とC児の手をぐっと離し、C児の方だけ向いていたので、私ではなく、C児とやりたいのだとわかり、私はC児の手を離した。A児は、C児の今の様子など気にする素振りは全くなく、こっつんこしようと頭を近づける。「そんなことをしたらきっと怒るか、泣くだろう」と思っていたら、C児はゆっくりとA児に頭を近づけた。そして、A児と頭をこっつん！とした。そのうち、指もA児のように頭に持って行き、触角にしてアリになって踊り始めた。私は、一緒に見ていた他の保育者と、思わず顔を見合わせて笑ってしまった。歌が終わると、C児は「もう１回やりたい！！」と大きな声で言った。

A児は、自分のイメージの世界があるが、マイペースに自分の興味のあることに関わる。クラスのなかでは動きがゆっくりで、みんなのペースについていかれないこともあり、友達との関わりが、上手くいかないことも多かった。一方、生き物がとても好きで、遊びにぐっと入り込む姿が面白く、なりきることをしたいというA児の思いを実現出来たら、きっと楽しいだろうと思っていた。何気なく選んだ「おつかいありさん」の曲だったが、ちょっとアリになって遊んでみようと働きかけたところ、A児もアリになって動き始めた。私はこっつんこと歌に合わせて動いただけだったが、A児は本当におでこを私にくっつけてきたので、とても驚いた。そして、A児とこうして、A児のイメージのなかで関われたことはとても嬉しく、楽しかった。同時に、自分の心が豊かになる感覚をもった。A児もまた、私と同じような感覚をもっていたのではないだろうか。そのことがB児との関わりへとつながり、さらには、自らC児に働きかける動きへとつながっていったのかもしれない。そして、戸惑うことの多い中で過ごしていたC児にとってもまた、心が開かれる出来事になっていったのではないかと思う。遊び心とは、人と関わっていった時に、楽しさを見出して、自分だけの世界から広がる感覚、そういう心もちなのではないだろうか。（佐々木麻美）

３．話題提供２　「宇宙の遊びの中で　５歳児」

１学期の終わりにD児が始めた『宇宙ミュージアム』。太陽や地球などの惑星や、大きなロケットを作り出すと、クラスの友達が「何やっているの？」「手伝おうか？」と関わってきた。D児は「アトリエ（様々な用途に使える部屋）で宇宙ミュージアムをやりたい」とイメージを話すが、まずは自分の保育室で楽しめたらと考え、D児と相談しながら出来上がった惑星を保育室の天井に飾ったり、ロケットに乗り込んでみたりしていた。夏休み、D児は自分の背よりずっと大きなロケットを家に持ち帰って完成させた。私は、どんな風にこの遊びが続いていくのかワクワクしながら、改めて惑星を保育室に飾り、２学期の始まりを待った。

そして、２学期。いよいよ宇宙ミュージアムをアトリエに準備することになり、保育室から惑星とロケット、宇宙の図鑑などを運び込む。D児は、ブラックホール、日食と月食、プラネタリウム、宇宙人の的当てなどなど次々にアイデアを出し、それぞれのコーナーをお客さんが回れるようにしたいとのことだった。宇宙のように壮大な計画に、どれも面白そうだなぁと思いつつ、どのようにしたら想像するブラックホールを形にできるのか、どんな風に日食や月食をお客さんに伝えたらいいのか、D児と私は悩んでしまった。その一方で、アイデアや具体的な考えが思いつくと、自分でどんどん動くD児なので、友達を頼ることは少なく、遊びのイメージがなかなか周りに伝わりきらないことも多かった。興味を持ってアトリエにやってくる子どもたちも、なにか面白そう、やってみたいと思いつつ、どうしていいのか分からない様子があった。私としても、D児のイメージを大事に聞きながら、子どもたちと一緒に相談しながら、と思いつつ、この壮大な遊びをみんなで楽しむには、保育者が場の作り方や、アイデアを形にするところをある程度支えないと……と、D児のもつ宇宙のイメージを形にする難しさと同時に、子ども同士の関わりや、遊びを支えるということの難しさにも直面していた。その後もアトリエから保育室や廊下に移動しながら、D児と数名の子どもたちの中で宇宙ミュージアムは続いていった。保育室に場を作り、年中児を招待してロケットに乗せたり、ビッグバンや星の絵を描いて廊下に貼ったり、その度に私も子どもたちの始めたことを一緒に楽しみ、やりたいと思っていることが実現するようにと関わった。

しばらくしてD児が思いついたのが『宇宙レストラン』だった。家で考えてきたメニューには「ロケットべんとう」「ちきゅうサラダ」など、宇宙にまつわる食べ物がいろいろ描かれていた。そして、D児はその弁当１つひとつを忠実に作り上げた。その完成度の高さに驚くと共に、どんなもので、どんな風に作るかまでイメージしてメニューを描いてきたことを感じ、ただただすごいなぁと思うばかりだった。D児を慕い、これまで一緒に宇宙ミュージアムを楽しんできたE児やF児も興味を持っていたので、D児とのやりとりを支えながら、みんなでレストランの準備を進めた。しかし、お弁当は作り溜められたまま、実際に宇宙レストランが開店したのは２学期が終わる１週間前のことだった。D児が廊下で宇宙レストランを始めようとすると、これまで一緒に宇宙ミュージアムを楽しんできた人たちが、張り切って集まった。D児は、自分が作ったお弁当をお客さんに振る舞うことよりも、お客さんを呼びこむ看板やレジを作ることに１人で夢中になっていたが、そんなD児を見て、看板をもって一緒に宣伝する人がいた。E児は、連日朝から机やお店台を運んで場を作り、嬉しそうに店番をする。お客さんが来ると、D児の作ったメニューを友達が自信をもっておすすめし、弁当を振る舞う中、F児が飾られた惑星や知っている宇宙について紹介する。そして最後は、D児の作ったレジで会計をし、みんなでお客さんを見送った。D児のもつ宇宙のイメージを受け、これまで淡くつながってきた人たちが、それぞれにやりたいことやできることを考えながら友達やお客さんと関わり、宇宙レストランを盛り上げる姿があった。そんな中、D児もやりたいことを友達に相談したり、休館日にもかかわらず来てくれた年少児のためにレストランを開店してもてなしたりと、自ら人に関わるようになっていった。

大盛況となった宇宙レストラン。宇宙ミュージアムでは難しかったのに、宇宙レストランでイメージが共有されながら遊びが展開していったのはなぜだったのだろう。まだまだ未知で壮大な宇宙に子どもたちはいつもワクワクしていた。そんな宇宙のもつ“遊び心”と、子どもたちの身近であるお弁当やレストランが合わさったからだろうか。１人ひとりが宇宙への想像を自由に膨らませることができる“ゆとり”があったからだろうか。それだけでなく、宇宙を介して緩やかに関わってきた子どもたちの関係性にも“ゆとり”があるように感じた。遊びのアイデアが豊富で、ものづくりが得意、だけど人付き合いは不器用なD児。D児を慕って一緒に過ごすうちに、宇宙への興味と遊びのイメージを膨らませ、動き出したE児とF児。D児の遊びの面白さに惹かれ、D児のイメージを受けて接客を盛り上げる人たち。互いに認め合い、支え合いながらその人らしくそこにいられる。そんな関係の中でD児もまた、自分の世界や人との関わりを広げていった。最初に宇宙ミュージアムが始まった時、１人で遊びを進めがちなD児が、いろいろな人と関わりながら自分の好きなことを楽しめたらいいなという願いがあった。目の前のその子、その願いに向き合いすぎて“ゆとり”がなくなることもたくさんあるけれど、どんな時も子どもたちの好きなことを一緒に楽しめる遊び心のある人でいられたらと思う。（伊藤綾子）

４．指定討論

遊んでいると、そのテーマを追求して深くなっていく時もあるが、脱線してふざけていることが面白くなっていく時もある。子どもは真剣に遊んでいるし、子どもと一緒に保育者も真剣に遊ぼうとするのだが、今一つ楽しさが得られない場合がある。遊びを盛り上げるために「何をすればいいのだろう」「どのような環境にすればいいのだろう」と“真面目”な保育者ほど、テーマに正面から向き合いすぎてしまう傾向にあるのではないか。そこに、新たな局面を見出すのが「遊び心」かもしれない。ただし「遊び心」をもとうと保育者が懸命になると、それは「下心」になってしまうのではないだろうか。原点に戻り、「子ども」から始めよう。（村石理恵子）